

もくじ

京都文化……………阪倉篤義……4
 芸術は個性の創造物……………江上照彦……6
 文化庁に注文する
 「日本の音」の認識を……………茅原芳男……8
 ——文化行政への私見——
 坐って三十年……………春風亭柳昇……10
 自分で買う結婚指輪……………安達香代……11
 ——ジュネーブ雑記・東京にて——
 海外文化ニュース……………13
 特集・芸術家在外研修レポート
 フランス・ポーランド・アメリカを
 研修地に選んで……………塚原琢哉……14
 第二国立劇場の設立推進を……………佐藤功太郎……15
 日本人の「味」をもった踊りを……………森下洋子……16
 ニューヨークの冬……………中村哮夫……17
 明日への劇場……………畑野一枝……18
 法人紹介……………19
 文化庁ニュース
 第13期国語審議会初総会を開催……………20
 「新漢字表試案」説明協議会を開催……………20
 ——大阪など5会場で——
 法令における表外漢字使用の実態調査報告まとまる……21
 レコードの無断複製に対する
 レコード製作者の保護に関する条約……………21
 レコード保護条約批准について
 日本レコード協会が要望書……………21
 日本音楽著作権協会52年度予算163億円を見込む……21
 文化行政長期総合計画について③……………22
 文化庁関係の国会質問第77回（通常会以降）……………26
 美術館・博物館・文化施設めぐり②
 日本画の山種美術館を訪ねて……………27
 我が町、我が村の文化行政
 花祭の里 愛知県東栄町……………28
 国立劇場ニュース……………29
 文化庁日誌……………30
 海外文化ニュース……………30
 文化庁への便り……………31

1977-7

No. 106

表紙 海の幸 青木繁筆
 解説は29ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

特集・芸術家在外研修レポート①

フランス・ポーランド・アメリカを
研修地に選んで



塚原 琢 哉
(写真家)

昭和五十年度から写真家が芸術家在外研修員の美術部門に加えられた時、多くの写真家は新たな期待に胸をふくらませていた。その第一回研修員に私が選ばれたことは大変光栄なことであり、私自身、写真の芸術性を高める機会を得られたことに大きな抱負と興奮を覚えたのであった。今日の写真、その目的と意義が一般表現芸術から遊離し、写真家が模索と苦悩を続けているのは、その存在自体が特殊であるのではないのだろうか。写真の多様化は益々進み、生活に密着し、そのコミュニケーション・メディアとしての優位性は誰もか認めている。しかしその写真が芸術上の表現となるならば、それはかぎらない作家の自由と理想を追求する行動ではないのだろうか。私の創作の延長線上にその意味を含めて私の研修テーマを「グラフィックアート」に於ける写真表現の可能性について、としたのである。研修地はフランス、ポーランド、アメリカに定めた。近代、現代芸術の

二〇世紀初頭の芸術運動の中に試みられた写真表現は、グタイズム運動からたしかに芸術の実験メディアとして確立していた。シュールレアリスト、マン・レイや構成主義の作家モホリ・ナギーの作品は時代の中心に人間の存在を主張した実験であり、彼等の行動はその後多くの写真家に影響を及ぼしたのである。シュールレアリスム作家の写真作品は自由な実験を織りなしたグラフィカルなリズムの中に写真特有の現実を構成することによって社会の



チュアルアート展にみられ、版画やマルチアルアートと同次元の主張を強めている。それはあたかも昏迷する社会の陰と陽を画面に滲ませている。写真は安易なようでもたしかにむずかしい表現メディアである。物理的な制約の壁にはばまれ、ややもすると機械的な現象の虜に落ち入るのである。写真の芸術的価値とは何なるであろうか。それは芸術の体質に根ざした作家のサブジェクティブではないだろうか。グラフィックと同一線上の写真は複数表現を展開させて、作家の生きざまを見せる様な連作こそ意味がある様に思うのである。そういう作品がポーランドの国際ポスター・ビエンナーレとグラフィック・ビエンナーレで強く感じた。特に東欧作家の持つ特殊な色と形の重層は一つの体質となつて、どろどろとした人間臭さがただよう。それは東欧の人達の苦悩が作品に自由闊達な実験の成果として顕著である。写真表現に於けるサブジェクティブの重要性は私の自問自答を益々深めるようになった。ポーランド研修中ポーランド写真家協会の主催によって開かれた私の個展は三つの都市で評判になった。作品を通して語り合った多くの芸術家は真面目な態度で私を彼等のソサエティに紹介した。東欧の芸術家は互いに孤立していない。そして表現メディアを開放した芸術家の自由なあそびは彼等の生活の基盤となっている様にみえた。ポーランドのグラフィックの研修はドイツ、ポーランドの民族的な体質と異なった芸術家のユート

ピアである。しかし、この質を異にする国々が芸術というレレシジョンの太いパイプで結ばれていることを強く感じた。それは芸術の形式や流行ではなく人間の有り方そのものだと思う。私の一年間の自由な経験から、写真は私の主張する人間回復への実験メディアとして可能であることを自覚した。同時に人間としての生き方を西欧の伝統と芸術的な土壌の中に見つけることが出来た。そしてすでに始まっている欧米の芸術家との交流は益々つながって

特集・芸術家在外研修レポート②

第二国立劇場の設立推進を

佐藤 功太郎

(指揮者)



昭和五十年秋よりの一年間は、幸いにも文化庁芸術家海外派遣研修生として、主に西ベルリンを中心にオペラとオーケストラ音楽の研修を重ねる事が出来、私の音楽生活にとって非常に重要な、且つ爽り多き一年となりましたが、この機会を与えて下さった皆様、まず心より御礼申し上げたいと思いま

さて、西ベルリンに着いて早速研修機関の一つである「ドイツオペラベルリン」に参りましたが、まずその規模の大きさに驚嘆の想いでした。大袈裟に言いますと、町の広い一区画全部が劇場とその付属設備であり、中では約一、〇〇〇人の人々がオペラを作るために働いています。ざっと数えて、年間に七〇本のオペラやバレエの作品が約三〇〇回公演されており、聞く所に依れば、年間予算の約三分の二が西ベルリン市によって負担され、安い価

格で二五〇万の市民が殆ど毎晩の様にオペラやバレエを楽しむ事が出来る形になっていました。これはドイツの他の大きな都市に於いては概ね同じ数字になるとの事ですが、オペラやコンサートに限らず他の芸術部門においても同様、国や市の力で文化を推進している姿勢が強く印象に残りました。また、ドイツ固有の文化的財産を大切に守り、育てる事は国民全体に関わる事であつて、文化的に豊かな生活を送る事を国民自身が非常に大切に考えているように思われました。細かい事ではありますが、入場券の価格も、ドイツオペラベルリンでは約七〇〇円から五、〇〇〇円まで客席数のほぼ等分に一〇段階に、ベルリンフィルハーモニーに於いては約三〇〇円から三、〇〇〇円の大段階に分けられており、このあたりにも、市民全体が彼等の芸術を自分の物として楽しむよう慎重に配慮されている事が窺われました。

研修の初期に於いては、ただ無我夢中で連日の練習や公演通いに明け暮れるばかりでしたが、徐々に本場の劇場の雰囲気やヨーロッパの空気に慣れにくるに従い、様々な事柄を未熟なりにも考えてみる様になりました。その一つに日本に於けるオペラの事がありまして、日本のオペラは、ヨーロッパのオペラに比較していても、既にかなり水準に達している事を実感として受けとめられますが、そこに於いては何よりもまず、今まで長い年月をかけて培ってこられた方々の努力と創意、ま

たそれでこそそのたまものということが想起されます。オペラは音楽、演劇、美術、照明、衣裳、訳詞等々非常に多くの要素が積み重ねられて出来る素晴らしい芸術であり、その上実際に舞台上には現れない裏側での人々の集合された力に負う所も大変大きく、この様に、多くの人、一人当たりの才能と努力が蓄積され結果として作り上げられてゆく、手作りの芸術、であると思えます。日本でのオペラの公演回数はドイツでのそれと比較しますとまだまだ少ないものではあります。それだけに並々ならぬものであり、未熟ながらもその一端に加わる事を大変幸せに感じています。

しかしながら、これらの方々の熱意も残念ながらまだ我が国にオペラハウスが一つも存在しないために、本来の力を存分に発揮されていないように思われ、是非とも現在進行中の第二国立劇場建設の計画を早急に推進していただければと思います。

御承知の様に今や日本の製品は自動車やカメラ、電気機器を始めとして世界中に至る所に溢れ、また良い評価を受けております。しかしこれ等は常に日本の所謂「経済大国」的な面での著名さである様に思われますが、私が、ドイツオペラベルリンや、ベルリンフィルハーモニー等の研修機関を訪れた際には、日本の文化推進のため、日本政府が海外に留学生を派遣する、という、彼等にとっては新たな面での印

特集 芸術家在外研修レポート④

日本人の「味」をもった踊りを

森下洋子

(バレエ舞踊家)



象が付加されたようであり、これは、外国で日本製品に接した折に感ずる日本人であるが故のある種の「誇り」にも増して、感じられた事でございます。しかしながら彼等の眼から見るや、日本に対するイメージは近頃の経済大国としてのものがかなり強いようであり、また、我々日本人がヨーロッパや米国について持っている知識の半分程度、またはそれ以下しか本来の日本について識られていないといった状態で、特に文化の面では残念ではあります、その傾向が最も顕著であるように思われます。この事は、私達皆が正しい姿での現在の日本の文化を更に広く、また積極的に海外にも紹介する事の必要性を痛感させられました。

不勉強ではありましたが、帰国後になって現在の文化庁の予算が国家予算の僅か一、〇〇〇分の一に過ぎない事を知り、その貴重な予算の中から研修させていただいた事に感謝いたしますと同時に、文化行政に対する国の姿勢の一端として、まずこの文化庁の予算を世界の一流文化国家なみに引き上げたいだけではないかと思いました。人間としても音楽家としてもまだまだ未熟な私ではございますが、今回の研修の成果をふまえ、先陣の方が培われてこられたこの日本の文化の、極く一部分なりともお役に立つことが出来れば幸いと思う次第です。

※ ※ ※

ニューヨークの冬、シカゴの冬、どちらも日本では経験したことのない峻烈さです。とくに今年一月のシカゴの寒波には驚きました。なにしろ零下六〇度なんて、シカゴでも百年目だそのものです。私などチビなものでタクシに乗る時も木につかまってないと飛ばされそうです。その上寒いというより痛いです。学校はお休み。会社も早退出というのにバレエ劇場だけは堂々と開幕です。はるばる日本から招かれた私達にはうれしさが溢りました。

ドン・キホーテ、海賊、くるみ割り人形、コッペリア、白鳥の湖、その他の曲目の中に、日本の作品木下順二原作、大栗裕作曲、松山樹子振付の「赤い陣羽織」のバド・ドゥを清水哲太郎さんと工夫をこらして踊りました。(写真)少し短いのもたたりませんが、大変よろこんでくれました。今度のことで日本の作品を上演するのはとても大切な仕事だと思いました。バレエの舞台は機械製品のように生み出すのではなく、なんといつても手

作りですから、毎日毎日違うのです。日本の作品について松山バレエ団は創立三十年になりますが当初よりの「日本人の味を盛った民族的バレエの創造」という方針をつらぬいてきました。

その「味」というのにも微妙なニュアンスがあります。「味」は伝統ともつながり、「味」は独特な風味という民族的なものを加味することにもなり、ただ西洋風な踊りだけでは表現できない何かがあるのだと感じており、私も子供頃から日本の作品には出演してまいりましたが、近頃やっとなら山バレエ団のねらう「味」という複雑なものに対して理解をほんのちよつとできかけてまいりました。日本人の味をもった踊りは日本人だけが分かるものでなく外国人にも分かってもらえるものでないかと本物ではないかと思うのです。高度な技術をぬぎにしてはお話しになりませんが技術だけで「味」が出せるものではないかと。古典バレエでもそれぞれ作品によって一つ一つ特徴があり確固としたドラマツルギーがあると思います。その上、原作にはたとえ



なり、私の契約日ではなかったのに、是非でてくれといわれ、大あわてで「ジゼル」全幕に出演しました。お蔭様で好評でしたのでほつとしました。お蔭で衣装では困りました。アメリカン・バレエ・シアターから主役の衣装はこれといわれても私には、ブカブカです。一月の契約にあった「コッペリア」でもブカブカでした。さあミシンとおしても私のホテルにはありません。お話ししたもかと思つていてニューヨークの友人が、そのまた友人のところに連れて行つてくれ、すぐさま改造。ま

です。さらに外国で思うことは、いつでも自己反省をする態度と同時に人に

感謝する心をたまたまなければ続かないとつくづく思うのです。

特集 芸術家在外研修レポート④

ニューヨークの冬

中村 喈 夫

(舞台演出家)



ニューヨークには寒い間だけだ。十一月から四月まで半年の滞在だったのだが、一月の寒さは本当にこたえた。御存知の通りニューヨークは細長い島であり、南が海、東と西は川と、三方を水で囲まれている。その水が凍るのだ。そして例の摩天楼の間にはすさまじい風が吹き荒れた。三方の水の上から吹いてくる風が荒れ狂うのだから、その寒さは何か狂暴なものが襲いかかってくるが如き攻撃的な力を持つている。私のいた間の最低気温は零下十七度だったが、そういう時は、こちらが真剣に身構えていないと寒さに刺し貫かれて命を失いかねない、というのが実感であった。そうして気合いを入れてニューヨークの寒さと対峙している内に、はあ、この荒々しい都市の性格は決定され、そこにこそニューヨークの文化なり芸術なりは根を持つているのだな、という風に理解されて来たのである。ブロードウェイの豪華絢爛

も、そのかげにきらりと光らせる鋭利さも、オフオフ・ブロードウェイの変革の力に満ちたエネルギーも、ニュー・シネマ系統のダイレクトに叩きつけてくる迫力も、すべてあの気候風土と切り離しては考えられない、というのがその土地でしか獲得出来ない貴重な実感であった。現在上演中の最高のミュージカルである「コーラス・ライン」も、オフオフの名門ラ・ママでの傑作「トロイヤの女」も、ちょうど私のニューヨーク滞在中に封じられた「カット・コーの菓の上」や「タクシー・ドレイバー」も、私の内心ではすべてあがきびしいニューヨークの冬とわがちがたく結びついてくるのである。

そんな冬のある日、雪がまじりの雨が冷たく降り、夜は曇りだと思わせような土曜の午後であった。私はオフ・ブロードウェイと呼ばれる一角、グリニッチ・ウェイレッジのサリヴァン・ストリート・ブレイハウスを訪れた。そこは私が日本で演出したミュージカル「ファンタスティックス」を何と十七年も続演している小劇場なのである。表に17とだけ大きな看板がかかっている。中へ入れば、鉄柱が四本と、ファンタスティックスと特長のある字体で書いたぼろぼろの幕だけ。黒い壁。百人あまりの客席。マネーだ、ほぼ満員である。此処はしかし、私が東京でこの芝居をやった渋谷の「ジャン・ジャン」という小劇場と何とよく似ているのだらう。形態ではなく、空間の質がそっくりなのだ。ピアノとハーブの奏者が登場し音楽が始まると、私は東京にいるのかニューヨークにいるのか判らなくなった。芝居が始まる。しゃべっている言葉が英語なのか日本語なのか、つまり言語ではなく、内容が、心が、直接ひびいてくる。見ながら私は、東京の方がいいなどという自惚れも持たなかった代わりに、ニューヨークの、つまり本家の上演にはとてもかなわないうなどという気持ちも全く持たなかった。そこにはこの戯曲と、この音楽を愛する者の深い共感と、共通の感受性がよみとれたからである。

あつという間に二時間はすぎ、私はしばしば一ととして客席に残っていた。すると楽屋の方から今父親役を演じていた俳優が出て来て私に「ミスター・ナカムラか」といふ。私が「そうだ」と答えると、固く手を握って「私がロア・ノートだ」といふ。私は当日、国際演劇協会を通じて終演後楽屋を訪れると予告してあり、プロデューサーのロア

つたく衣裳をかかえて女一人大地を歩くとも申しましようか、でも渡る世間に鬼はなくて何と無事にやりとおせました。衣裳は皮膚のようなもので自分のものでない、どうも落ちつきません。「味」のことですが、ニューヨークでも、パリでも日本料理店がたくさんできて、オサシミ、オスシ、ミソシルなど自由に食べられますが、日本の「味」となると、どうでしょう。日本の「味」も、ただ生の魚をつかったから日本料理だというのではなく、そこに独特の現代性、つまり栄養と美味、そして料理人の料理を出す形式の確立、れば日本料理も世界の料理の代表的なものになれると思います。舞踊での日本人の「味」は日本の作品の中だけに生かされるのではなくて、外国の作品や、古典作品の中にもつらぬき生かされ、発展しなければいけないのだと感じております。料理の「味」は二オイと眼と舌ですが、バレエの「味」は耳と眼と心によって感ずるものです。耳と眼はすぐ消えてゆきます。消え去るものをいつまでも脳裡に残す芸術、それがバレエ芸術の「味のむすかしさ」です。外国でよく思うことの一つは日本人の「味」を求めて日本全国津々浦々歩き民俗的踊りをみたいことです。さらに外国で思うことは、バレエのお客が劇場で楽しみ、御自分の感動をその場で発散することに感心します。良いものを良しとし、悪いものを悪いとする態度だと舞踊家のはげみになるの

・ノット氏がお待ちしているむねの伝言もきいていたのだが、その人が製作者と俳優をかかっていることはいかにも知らなかったのだ。しかもその上に驚いたことは、氏は何と十七年間この役を演じ続けているのだという。「私も始めた時は四十代だったが今はもう六十代になってしまったよ」ともいう。他の役々は二、三年か四、五年で新しい人にバトンタッチして今はもう五代目か六代目らしい。一口に十七年というが、生まれた子供が大学入試の年になるだけの歳月である。ところが氏の演技には、だれもか情性とかいったものはみじも感じられない。むしろこの人が一番いきいきと新鮮であったくらいなのに驚嘆した。

楽屋で皆に紹介される。狭い楽屋もジャン・ジャンと酷似している。コーヒとビザを出されておしゃべり。持参した日本の上演写真にはすごい興味を示し、うばい合うように見る。主役のエルゴ役の俳優曰く、「この日本人の俳優(宝田明)の方が俺よりずっとハンサムだ(廻り)の皆(勿論)」。大笑い。老いたる旅役者の役(天本英世)については「似てる、そっくりだ、どこの国にもこういう変わったのがいるね」。また大笑い。ルイザ(少女)役の女優曰く「私は沖繩の生まれ、でも日本語はしゃべれませぬ。マット(青年)役の若者、アメリカ人にしては無口でニコニコしているだけで話さない。そんな所が日本でやった男と似てる、という」とまたニコニコ。その内に、主題

曲の「トライ・トゥー・リメンバー」を日本語で歌ってみてくれという。私も素直に受けて歌う。合の手内は皆が英語で入れる。大喝采。その所に舞台監督が来て、「三十分前だよ、夜の部が始まるのだ。名残りを惜しんで別れを

特集 芸術家在外研修レポート ⑤

明日への劇場



畑野 一枝

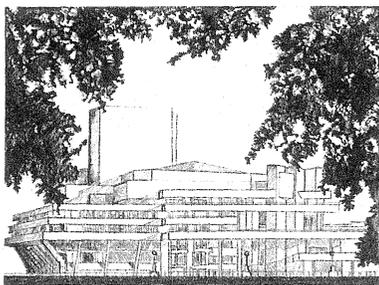
(舞台美術家)

私は、文化庁派遣の舞台美術家として、二年間、主に英国、ロンドンを中心に研修をしてきた。あちらの今頃は、ハイドパークに、クロッカスの花々が、日を浴び、いっせいに咲き乱れ、劇場街で有名なウエストエンドのそれぞれ劇場ロビーには、軽快な服装に衣変えた老若男女が目立つ頃である。パブでは、人々が春の到来を喜びながら、政治、経済、文化、芸術を話しながら、話の花を咲かせながら、グラスを傾むけ合っている季節でもある。

私が研修のために身を寄せていた英国国立劇場も、こけらおとしから満一歳の誕生日を迎えた。この劇場は、技術的にも、思想的にも、今世紀の劇場建築の粋を集めて完成したものである。英国が世界に誇っている劇場である。演劇の非常に盛んな英国にあって、国

つげると、ロア・ノット氏曰く「ここはお前の家だと思っていづても来い」と。外へ出ると都市の定、吹雪になっていた。でもこの都市へ来て始めてふれた人間の暖かさに満足してニューヨークの夜の街へ歩み出た。

立劇場建設は、すでに、一九世紀半ばからの長い間の懸案であった。ナショナルシアターカンパニーを創設したロレンス・オリビエから首席演出家が、現在のピクチャー・ホールに代わり、七か年の歳月を費やし、一九七六年三月に開幕した。この内部には、大きさと目的を異にした三つの劇場があり、それぞれの劇場は、建設に当たって貢献のあった功労者の名前が付いている。座席数千六百六十の大劇場は、オリビエ劇場と呼ばれ、ギリシャの古典劇から現代劇まで、幅広い劇形態に対応できるようなオープンステージになっている。中劇場は、リトルトン劇場と呼ばれ、座席数八百九十、欧米の劇場によくみられる伝統的なプロセニウムアーチのある舞台であるが、ここのものは、幅も高さも変えられるシンプル



The National Theatre in London, the view from Embankment

なデザインのものである。小劇場は、コッテスロー劇場と呼ばれ、全体が立方体の箱のような空間で、客席を自由に設置することが出来る。四百人位収容できる。小規模の公演や、実験的な公演に使用される。大と中劇場は、レパトリーシアターとして、常に、二、三本の公演が日変わりで打てるようにバックステージ、サイドステージがかなり広く、機能的で、装置の円滑な転換のためのフライタワー(かなりの大きさの吊り物が舞台天井に飛び切る)も付いている。劇場の舞台の裏側の部分全体には、大道具、小道具、衣裳などの製作場が豊かな空間の中にあり、互いに機能的に配置されていて、ほとんどの物を劇場内で作ることが可能になっている。

この国立劇場のあるサウスバンクは、近年ロンドン市が、チームズ河南岸に、

リバーサイド再開発の一環として、一大文化センターを築き上げた所である。劇場の他、演奏会場として音楽ファンにお馴染みのロイヤルフエスティバルホールを始め、国立映画劇場、美術のための大ギャラリーなど、それらが全て、遊歩道によって結ばれており、今や英国文化のメッカになりつつある。一つ文化現象が、文化財産にまで生長、発展し、人々が、その文化を享受することが出来るようになるまでには、長い時間の道のりを経なければならぬだろう。と同時に、その歴史的時間の中で、その文化が、幾度となく推敲を重ねられ、淘汰されるのである。人間の歴史の流れの中にあって、正當に淘汰されるためには、その文化を大切にし、愛情深く真剣に育てていこうとする意志と、魂が受け継がれていかなければならないだろう。

我が国においても、演劇活動は、欧米にも負けず劣らず、非常に盛んである。現代の同時代に生きている人々のための、生きた演劇文化を創るために、現代の演劇が生かされる空間を持った国立劇場の建設は、多くの演劇人、文化人の希求するところのものになってきていると思ふ。

文化国家、文化都市が持つ劇場という観点に立って、劇場の建物だけを問題にするのではなく、そこに集う人々の文化的環境という側面から、都市計画を含む文化政策の事業の一環として、成されるべきだと思ふ。また、その劇場の中で、演劇を創っていく演劇人達

のコンセプトも、十分に考慮されねばならない問題だと思ふ。

演劇文化発展の将来に目をやった時、その担い手になるべき専門的技術者養成のための国立演劇学校、研究所などを同時に創設することも、有効かつ意義深いことと思える。私自身、明日への演劇空間に思いを馳せる時、日本文

化を創造して行く推進力になるような新しい国立劇場の実現を、切に望むのである。

編集後記

○本号では、在外研修制度によって、外国に一年ないし二年滞在され、研修されて来られた芸術家の方々に所感をのべていただいた。

○茅原芳男氏の「文化行政への所見」は、早くから文化庁へ御投稿いただいていたもの、團伊玖磨・小泉文夫『日本音楽の再発見』講談社現代新書と同様、日本の民族音楽を大切に「見直そう」としているが、これにとどまらず、いくつかの注文を出している。文部省文化庁関係者の味読をすすめたい。

○人事異動により、この号を最後に編集担当が変わります。67号から106号までの40冊、三年余り、お世話になりました。後任は草場氏よろしく。(大家重夫)

広告の問合せ・申込み先

株式会社ぎょうせい 営業課

TEL(03)三六八二二四(代表)

「文化庁月報」七月号

(通巻第一〇六号)

昭和52年7月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 〒100 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)三六八二二四(代表)

販売口座 東京 九一六一番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円